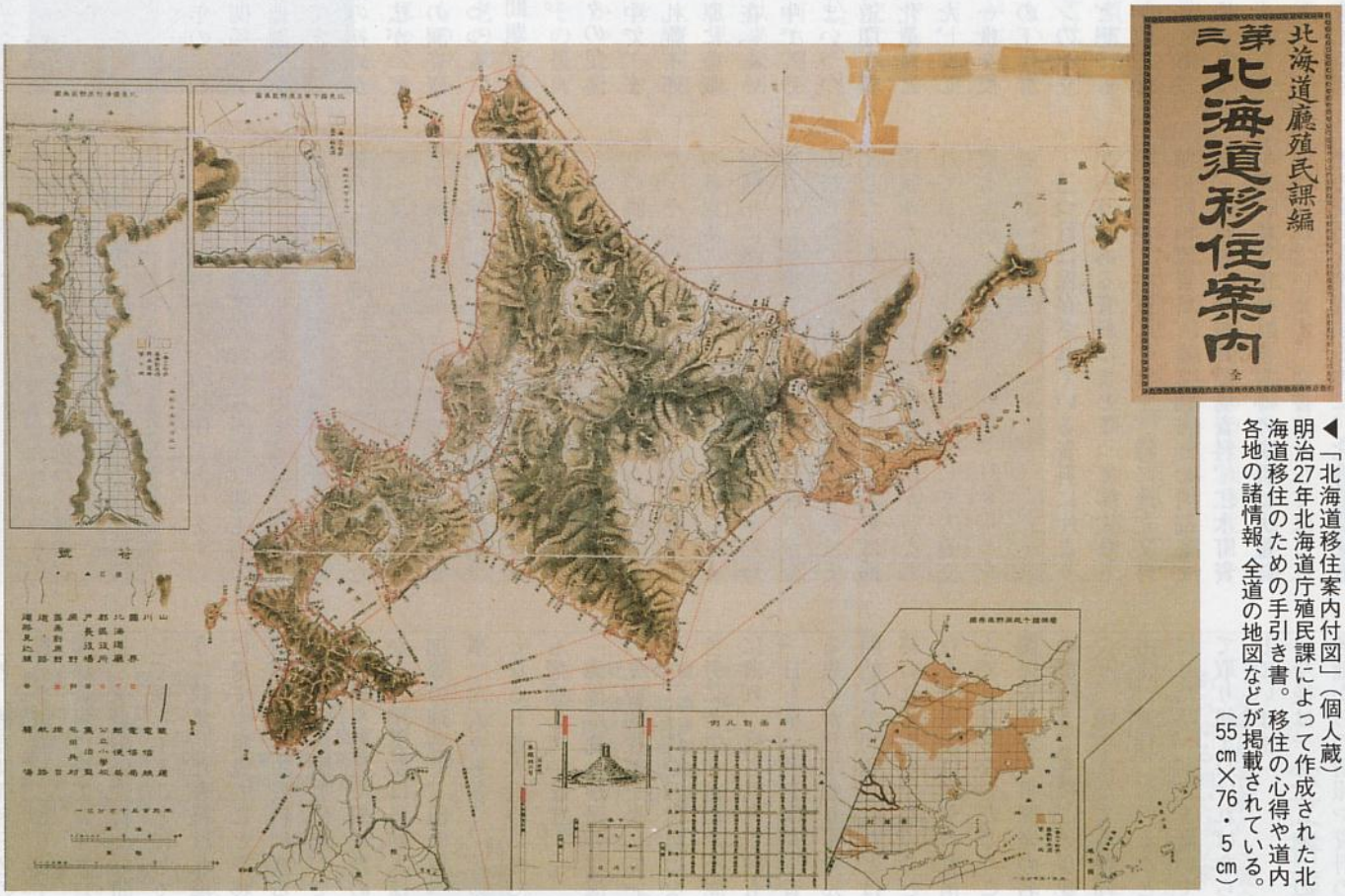
文書館だより

第11号
徳島県立文書館



◀「北海道移住案内付図」（個人蔵）
明治27年北海道庁殖民課によって作成された北海道移住のための手引き書。移住の心得や道内各地の諸情報、全道の地図などが掲載されている。（55cm×76・5cm）

第16回企画展　「徳川慶喜と蜂須賀家」

平成10年4月28日～8月2日

幕府の将軍徳川慶喜の娘筆子は蜂須賀正詔の妻です。慶喜と筆子の間の手紙から両家の意外な関係がわかります。

第16回資料紹介展　「絵はがきで見る明治・大正・昭和の徳島の姿」

平成10年8月4日～10月25日

徳島県内でも明治以降、数多くの絵はがきが作られました。本館所蔵の絵はがきから失われた徳島の姿を紹介します。

第17回企画展　「阿波国文庫と淡路国文庫」

平成10年10月27日～平成11年1月31日

現在は四散してしまった「阿波国文庫」、「淡路国文庫」。蜂須賀家所蔵の貴重な書籍類の姿を、残された資料で解明します。

第17回資料紹介展　「徳島県民の北海道移住」

平成11月2月2日～4月25日

五万人以上の徳島県民が移住した北海道の開拓移住。本年度から実施している北海道移住関係資料調査の報告です。

歴史講演会　徳島の中世文書
―井口家文書について―（仮題）

中野英夫　法政大学教授
平成10年10月31日（土）
21世紀館イベントホール

〈目　次〉

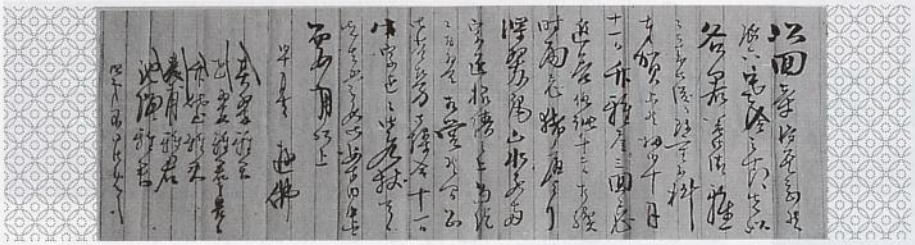
館長あいさつ……2
古文書の世界　俳人遊物仏の手紙…3
北海道移住の足跡を訪ねて……4
静内に残る蜂須賀家の資料……6
公文書の収集状況……7

「古文書の世界」

俳人漂雲閣遊仏書簡

主任専門員　福田憲熙

この書簡は、美馬郡半田町の神宮寺住職であり、また俳人として有名であった佐伯道明師が、明治十三年（一八八〇）〈推定〉旧十月七日に、来る十一日豊秋庵竹雅の三回忌追善俳諧を、翌日には時雨忌を当神宮寺で営むので、ぜひ参会してほしい旨の案内状です。同町の小野出身で、広島県福山市大門町在住の酒井一宇氏所蔵の酒井家文書の内にあります。



解読文

以回章得貴意候
辰下寒冷之節先以
各君益御清雅
ニ被成御渡リ珍重不斜
奉賀上候扨旧十月
十一日竹雅居士三回忌
追善俳諧十二日打続
時雨忌猪ノ尻より
深翠庵山水居両
宗匠招請之上当院
ニおゐて相営候間乍
御苦労御操合十一日
八字迄ニ御飛杖可被下候
先者右之段御案内申上候
要用　以上
旧十月七日　遊佛
其翠雅君
花翠雅君　奉畏候
竹岱雅君
農甫雅君
池塘雅君
次第不同御免可被下候。

読み下し文

回章を以って、貴意を得候。
辰下寒冷の節、先ず以って
各君、益々御清雅
に御渡り成られ、珍重斜めならず、
賀し上げ奉り候。扨、旧十月
十一日、竹雅居士三回忌
追善俳諧、十二日打ち続き
時雨忌、猪の尻より
深翠庵・山水居両
宗匠招請の上、当院
に於て、相営み候間、
御苦労乍ら御繰り合わせ、十一日
八字迄に御飛杖下さる可く候。
先ずは、右の段、御案内申し上げ候。
要用。以上。
旧十月七日　遊佛
其翠雅君
花翠雅君　畏り奉り候
竹岱雅君
農甫雅君
池塘雅君
次第不同御免下さる可く候。

用語解説

回章　廻章とも書く。①方々へ回す文書。まわしぶみ。回状。廻状。回書。②返事の書状。回書。

貴意　あなたの御意見。お考え。御意。

辰下　時下に同じ。いま。この節。

清雅　きよらかでみやびやか。清らかで上品なこと。秀麗。

珍重　①珍しい物として大切にする。②お体お大事に。体を大切にしなさいと人に言うこと。③賛美の意を表す言葉。④めでたいこと。祝うべきこと。

不斜（機嫌・喜びなどについていう）ひと通りでなく甚だしいこと。

竹雅居士　本名は木村金蔵。半田町木ノ内の人。文化三年生れ。半田水音分社五世社長。庵号は豊秋庵。明治十一年没。七十三歳。

三回忌　三周忌ともいう。人の死後、満二年目の忌日。

時雨忌　芭蕉忌（時雨会）。時雨の降る季節の十月十二日に松尾芭蕉が没したところから名付けられた。

猪ノ尻　古くは井ノ尻とも書く。美馬郡猪尻村（現脇町猪尻）のこと。

深翠庵　本名は柴田宗三郎。美馬郡脇町柴床の人。文化十年生れ。初号桃原、のち此木。従来の可興社とは別に正風社を興した。明治十七年没。

山水居　本名は山下美馬助。美馬郡脇町猪尻の人。享和三年生れ。号は山水居渡橋。稲田氏の臣。臥林庵蘭室の嗣子。句集『阿波』『時雨忌』を刊行。猪尻脇町可興社を結成。明治十七年没。

招請　招き呼ぶこと。おいでくださいと招く。招請に同じ。

当院　美馬郡半田町神宮寺にある真言宗御室派の神宮寺のこと。

八字　午前八時のこと。明治期には、時を「字」と書くことが多い。

飛杖（杖を飛ばす意から）諸国を巡り歩くこと。また参会・来会・集ってくること。

要用　①さしせまって必要なこと。肝要。②重大な用事。必要な用事。

遊仏　本名は佐伯道明。美馬郡美馬町郡里喜来の人。旧姓香西。嘉永元年生れ。神宮寺二十一世住職。半田水音分社六世社長。明治十九年没。

其翠　本名は篠原福太郎。半田町小野の人。幕末・明治中期ごろの人。

花翠　本名など詳細不明。半田町小野の人で、幕末・明治中期ごろの人。

竹岱　右に同じ。

農甫　本名は酒井弥蔵。半田町小野の人。文化五年生れ。屋号は境屋。号は春耕園農甫。易学に通じ、心学に造詣が深かった。半田の俳諧仲間、特に小野篁連中の指導的地位にあった。明治二十五年没。八十五歳。

池塘　本名は大泉徹吉。弘化二年生れ。三好郡山城町川口の人。井川宇兵衛五男。のち、半田町小野の大泉爲之丞の養子となる。副戸長・戸長・村会議員を歴任。号は芳水園池塘。書道にも長じ、俳名は近郷に轟いていた。大正十五年没。八十二歳。

合点　「がってん」と読む。承諾の意で、文書中や名前の肩につけた斜線のこと。

ごあいさつ

館長　小林勝美

徳島県立文書館は平成九・十年の二ヶ年をかけて「徳島県北海道移住関係資料調査」を企画し、昨年度より現地調査を開始しています。北海道は遠くて宏大な国であり、入植した人々も明治の初めから始まり、しかも北海道全域に広がっています。そのため足跡を求めての調査研究は容易なものではないと感じつつも、本年度の現地探訪で垣間見た問題点を二、三あげて見たいと思います。

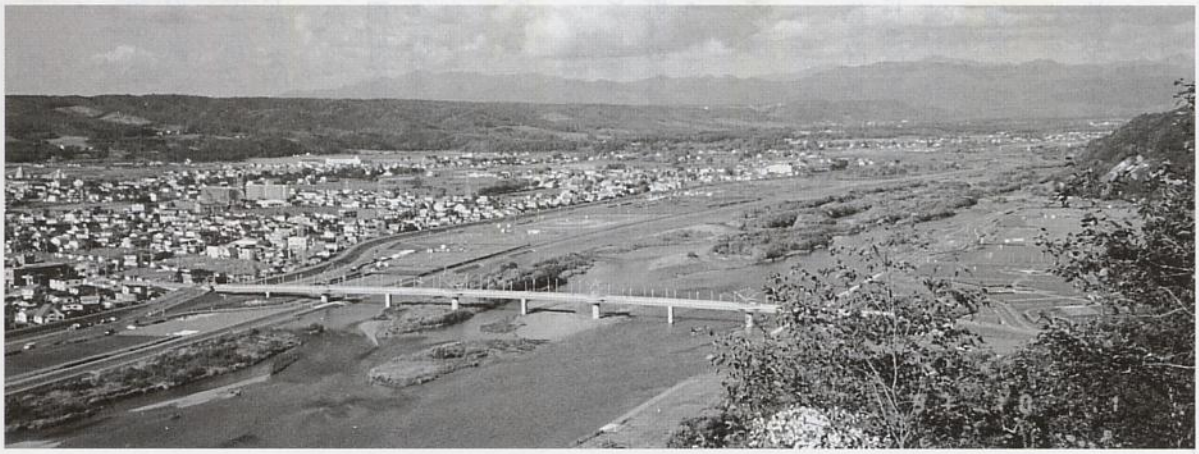
一つは北海道へ移住した人々の足跡は、長年の風雪と時代の流れの中で、まさに消え去ろうとしています。札幌市郊外の石狩川が蛇行している氾濫原に藍栽培を試みた広大な畑作地は、現在「あいの里」として大規模開発が進行中で、その痕跡は根底からなくなってしまいつつあります。ただ、片隅に「北海道開拓発祥の地」の石碑と地神さんが文化遺産として残されているのみです。また、同じ郊外で、北海道の赤煉瓦造りで一世を風靡した「久保」の登り窯跡などの工場群は再開発されて、近代マンションの林立する都市に変貌し、元の様相など想像もつかない現状になっています。かつては遠く徳島の地から雄大な夢を懐いて移住した人々の業績も、今の時期を逃がしては永久に喪失してしまう恐れが十分あり得ることを痛感いたしました。

二つ目は、明治初年代の稲田家家臣団の日高郡静内地方への移住であります。入植当時の農業経営から現在は競走馬のサラブレット生産地への変革は、記録や足跡までも消え去り、調査や研究がより難かしい地域になりつつあります。ただ、現地を訪れて驚いたことは静内の地形が徳島の脇町と瓜二つであったことです。静内川の流域には河成段丘が形成され、上段には牧場が開かれ、下段には水田耕作や牧場が営まれ、対岸のシャクシャインの丘（アイヌ人の最後の砦）よりの眺めは絶景の一言につきるものでした。その上に、うれしかったのは静内町の各集落に徳島や淡路から入植した人々が開拓に汗を流し、五穀豊饒を祈った地神さん（徳島）や社日さん（淡路）が今も祭られていることに深い感動をおぼえました。さらに現在、静内町と脇町は稲田家ゆかりの地として文化交流が行なわれており、今後も姉妹都市として人的交流も含めての友好が促進されることを願っています。

三つ目は保存されている資料に片よりがあり、ある資料はまとまって膨大なものとなっていることです。特に道立文書館の稲田家資料、道立図書館の阿部家文書、雨竜町の蜂須賀農場資料、仁木町資料及び伊達市や壮瞥町等の資料は大量に保管されています。文書館としてはこれ等の資料を調査するのに、北海道関係者二名、徳島関係者三名の計五名で調査委員会を組織しております。今後は北海道関係資料は全てマイクロフィルムに撮影し、徳島関係資料（新聞等）はコピーをして保存することにしています。このように収集した資料は北海道の人達が徳島に来て、祖先のことや移住についての動機等を調べる資料にするとともに、徳島でも移住の調査研究ができるように基礎的資料を整えて置くためであります。しかし、現実には当初入植した地が人口増加等の理由で、他の地へ移り、開拓に従事した人々も多く、その人達の調査研究となると並大抵のことではできないことも痛感しています。

最後に徳島県民の北海道移住は、全国の先駆的役割を果しているし、子孫達も現在、三代や四代目となり、入植当時の苦労に苦労を重ねた不屈の精神も日増しに薄れ、残された資料も散逸する中で、一日も早い調査研究や資料収集が急がれる思いがしてなりません。また、調査を開始して判明したことは、二年や三年で終われるものでないこと、補足調査まで行うと思えば数年の覚悟と意気込みがなくてはならないだろうこと。さらに移住関係資料が、再開発の名のもとに入植地の痕跡までも根こそぎ変貌されつつあること、残された文書資料も分散や損傷・劣化が進行していること等を目のあたりにした時、何にを置いても緊急課題として取り組まなければならないことを痛感しています。

今後は一人でも多くの人々の支援と、各地からの情報や資料の提供をいただきながら、実り多い調査研究にしたく思っております。徳島県や北海道の皆様方の暖かい御鞭撻をお願いいたします。



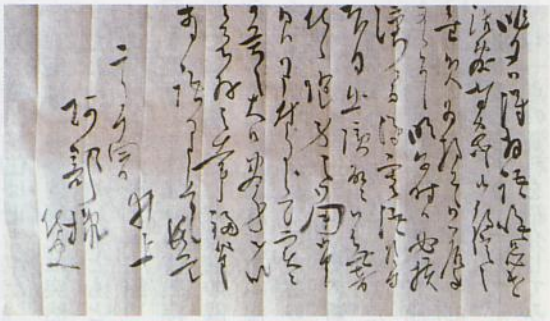
静内の眺望　ーシャクシャインの丘よりー

Ⓑ明治30年代の蜂須賀農場（雨竜町）

蜂須賀農場のあった雨竜町には徳島市の国魂神社を分霊した雨龍神社があります。信仰に関してはこの他にも、庚申信仰や八十八カ所など徳島から持ち込んだゆかりのものが各地に散見できます。

●徳島の維新史を物語る阿部興人文書

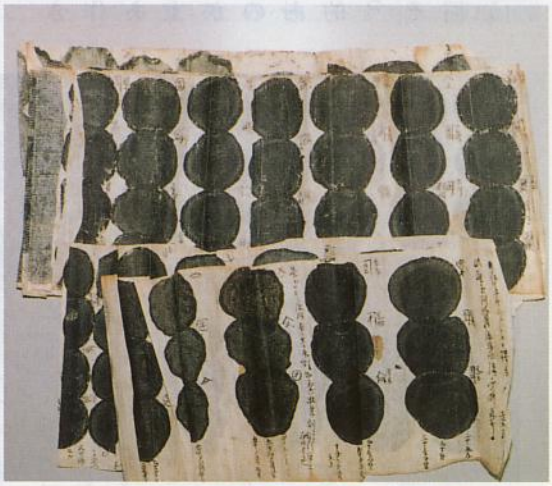
北海道立図書館に収蔵されている約二千点の阿部家文書（写真Ⓒ）は、明治維新期に徳島の政界で活躍し国会議員にもなった阿部興人の関係文書が含まれています。興人と徳島県大参事井上高格や有力藍商との往復書簡も数多く残っており、徳島県内には少ない明治期の貴重な政治史料です。なお北海道での藍製造に取り組んだ兄の滝本五郎や、北海道新聞界の重鎮養子宇之八も北海道開拓史上の重要人物です。



Ⓒ阿部家文書・阿部興人あて井上高格の書簡
北海道立図書館蔵

徳島県民の開拓記録の写真は少ないのですが当時の一般的な開拓風景の写真（写真Ⓔ）です。熊や蚊・ブヨ・ネズミの襲撃など開拓の苦労は想像を絶するものがありました。

Ⓔ明治期の開拓小屋建築風景・北海道大学図書館北方資料室蔵



Ⓓ北海道でつくられた藍の手板紙

東静内に明治31年建てられた店舗を北海道開拓の村に移築したもの（写真Ⓕ）。和洋折衷様式で当時の風俗を伝えています。

Ⓕ旧武岡商店・北海道開拓の村

●北海道での藍づくり鎌田家文書

北海道に移住した徳島県民が最初に試みたのは阿波藍の製造でした。昭和新山のふもとの壮瞥町郷土資料館には徳島から入植した鎌田新三郎家の藍づくりに関する資料などが数百点残されています（写真Ⓓ）。鰊粕など魚肥の地元調達など、北海道ならではの利点を生かした藍づくりは次第に定着し、藍業そのものが衰退するまで盛んに行われました。

【調査を行った箇所】

北海道立文書館、北海道立図書館、北海道大学付属図書館、静内町郷土館、静内町稲田会、仁木町史編纂室、壮瞥町立郷土資料館、蜂須賀農場、札幌市史編纂室、札幌県人会事務所、アイヌ民族文化研究センター、北海道開拓記念館・開拓の村など。

【調査を予定している箇所・資料】

陸別町の関寛斎関係資料、伊達市篠原家の藍作関係資料、本別町の板東勘五郎農場関係資料など。

【新聞記事の収集】

(1) 北海道内
「函館新聞・北海タイムス・小樽新聞」

(2) 徳島県内
「普通新聞・徳島日々新聞・徳島新聞」

北海道移住に関する新聞記事の収集は資料調査委員の先生方のご協力を得て道内関係の新聞についてはほぼ終了し、県内の新聞に関して現在進行中です。

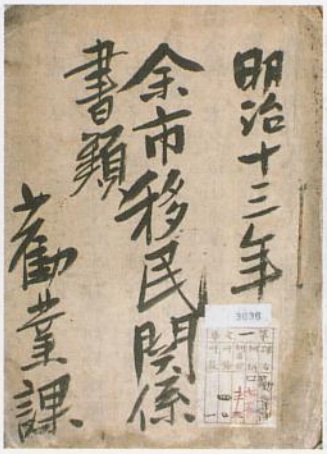
（古文書係長　立石恵嗣）

徳島県民の北海道移住の足跡を訪ねて

北海道と徳島県民の歴史的関係は深い。幕末維新期にはカラフト探検や北地開拓で活躍した岡本監輔（韋庵）、庚午事変後の稲田家臣の静内への集団移住、屯田兵や自作地を求めての農民の集団移住などかたちはさまざまですが、徳島県民の北海道開拓に果たした役割は大きいものがあります。明治・大正年間を通じて約一万五千戸・五万人以上の人々が移住し、近畿以西の西日本では最大の北海道への送出県でした。南国阿波では想像できない厳しい自然環境のなかで苦闘し、成功をおさめた人、挫折した人、その開拓の歴史はもうひとつの徳島県民の近現代史でもあります。

昨年より北海道における県民の足跡を求めて道内各地を調査していますが、その一端を報告します。

◀北海道立文書館（札幌市）



◀「明治十三年余市移民関係書類」北海道立文書館蔵

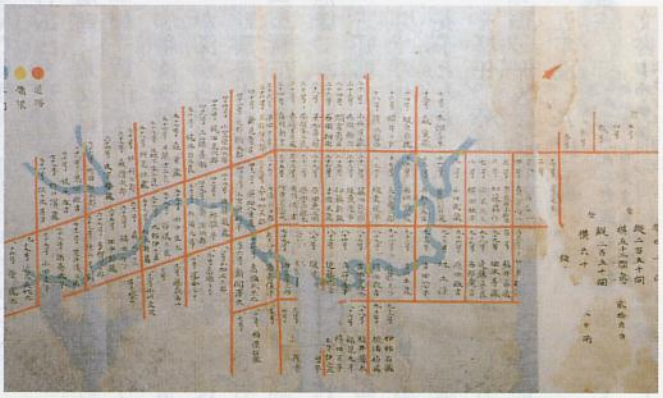
●移住関係公文書の宝庫・道立図書館

旧北海道庁（赤レンガ庁舎）である道立文書館には、江戸時代末からの公文書や行政資料が約二万点が収蔵されています。稲田家臣の静内移住に関する「稲田邦植旧家来禄高名簿」などの公文書、農民団体の移住や入植に関する申請書や地図など貴重な公文書が簿書にしてつづられています。また膨大な簿書の中に分散して収録されている史料も多く、重要なものについてはマイクロフィルム化による作業を進めています。

◀北海道移住関係地図

●徳島の仁木竹吉がひらいた仁木町

小樽市近郊の仁木町は、明治十二年北海道での藍作を目指した麻植郡児島村出身の仁木竹吉が率いた農民移住団体百十七戸が入植してできた町です。入植初期には徳島からの移住センターの役割を果たしていたといわれます。この図（写真Ⓐ）は最初の入植者の土地割り当ての図です。



Ⓐ「余市移民関係書類」付図

●日本最大級の民間農場・蜂須賀農場

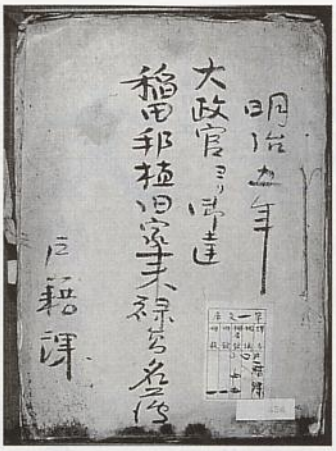
民間の農場としては日本最大級の蜂須賀農場（写真Ⓑ）は、明治22年に蜂須賀茂詔が三条実美らとともに五万町歩の土地払い下げを受けて設立した華族農場が起源です。大正末期には大規模な小作争議が起こりました。雨龍町には農場に関する土地台帳や戸籍台帳など大量の史料が残っています。

まずこの資料が作成された時期を考えると、正員が蜂須賀隠岐守を名乗っていたであろう正徳四年九月（一七一四）から享保十年七月の間、さらに稲田大炊の九郎兵衛への改名時期（稲田家相続のとき）から享保五年十二月以前であることがわかる。この期間の中で、蜂須賀綱矩が徳島へ五月三日に帰国した年は、「阿淡年表秘録」によれば享保五年ということになる。したがってこの史料が作成されたのは享保五年（一七二〇）五月十八日と考えられる。内容は、実の父でもある徳島藩の当主淡路守綱矩が参勤交代による徳島帰国に際して出された礼状である。

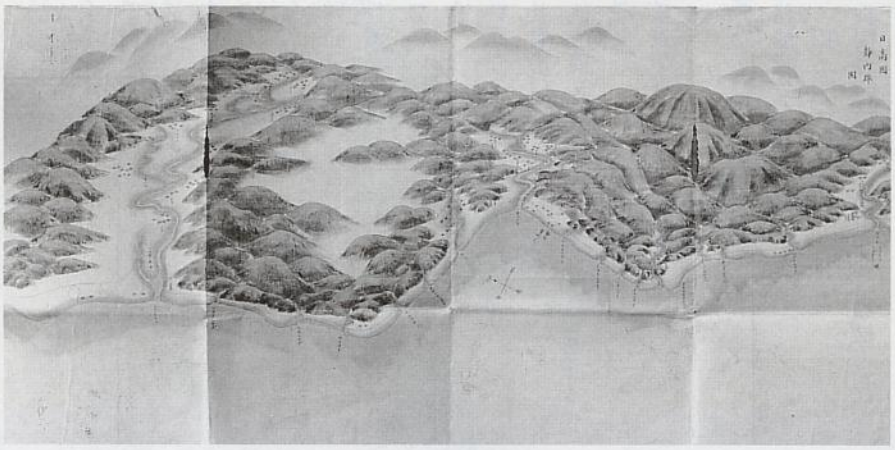
この資料は北海道・静内とは何も関係のないものであるが、享保五年以来稲田家に伝わり静内移住に同行したと思われる家来に引き継がれ、さらに郷土資料館に引き継がれて残されていたと考えられる。わずか四七年しか存在しなかった分家藩阿波富田藩の三代目当主（その後両藩を合わせて徳島藩七代目当主となるが）から、本藩阿波藩の筆頭家老の家である稲田家宛に出された珍しいものであり、徳島と静内の浅からぬ絆を思わせる一枚の史料と言えるのではないだろうか。

稲田家の北海道静内移住に関する詳細は、平井松午「北海道への士族移住とその定着状況」徳島地理学論文集第二集一九九七年、「静内町史」等を参照してください。

（主事　金原祐樹）



【稲田邦植旧家来禄高名簿・北海道立文書館】



【日高国静内郡地図②北海道大学図書館蔵】
静内は明治初年の庚午事変により稲田邦胤家臣が処分として強制移住させられた入植先である。静内町や各地に当時の稲田家臣団の名簿をはじめ貴重な古文書や古地図が残されている。

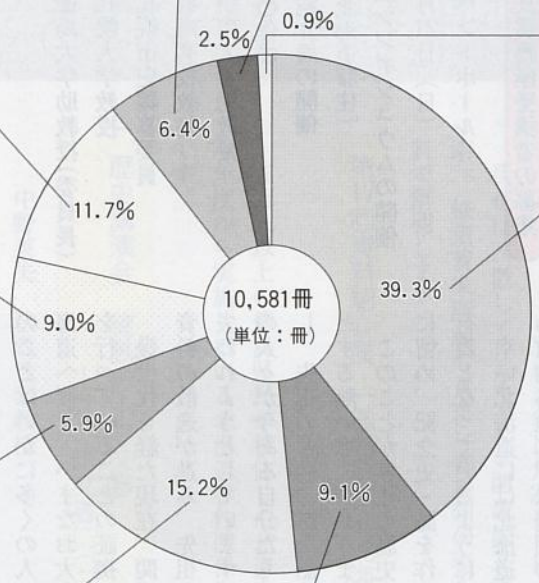
公文書薄冊の収集状況

文書館資料の主要な部門に公文書があります。県行政という大きな多面体のあらゆる面では立案・決裁が毎日繰り広げられています。

開館以来七年あまり、この間に収集された公文書の状況を円グラフでお示ししましょう。

なお、課名は平成九年十二月末現在のものです。今後とも公文書の収集にご協力をお願い申し上げます。

（副館長　石塚弘三）



保健福祉部　683

同和対策課	333
保健福祉政策課	163
薬務課	69
障害福祉課	59
児童家庭福祉課	23
日和佐保健所	13
川島福祉事務所	10
高齢保健福祉課	10
日和佐福祉事務所	3

教育委員会　267

生涯学習課	195
障害児教育課	44
体育保健課	14
教育総務課	13
文化財課	1

選挙管理委員会　90

環境生活部　1237

消防防災安全課	635
環境管理課	246
環境政策課	175
環境整備課	97
生活文化国際総室	84

土木部　952

砂防防災課	275
港湾課	426
河川課	94
都市計画課	65
用地補償課	63
日和佐土木事務所	23
営繕課	5
住宅課	1

企画調整部　623

政策調整課	2
統計調査課	621

農林水産部　4157

森林整備課	2139
水産課	838
農林政策課	580
耕地課	454
林業振興課	64
川島農林事務所	42
園芸農産課	26
営農振興課	13
徳島農林事務所	1

総務部　1608

市町村課	1208
総務県民課	285
税務課	75
日和佐財務事務所	24
秘書課	9
人事課	6
徳島財務事務所	1

商工労働部　964

労政事務所	766
商工政策課	147
労政訓練課	38
物産観光事務所	6
観光振興課	6
女性職業センター	1

静内に残る蜂須賀家の資料

北海道日高支庁静内町は、隣の新冠町とともにサラブレッドの故郷として名高い北海道南岸の町である。われわれが訪れたときは、天気もよく温暖ですごしやすいという印象であった。

この静内町は、明治三年（一八七〇）に起こった庚午事変ののち蜂須賀家の家老をつとめていた稲田家が明治政府から拝領し、譜代の家臣団を引き連れての集団移住がなされた場所としても知られている。当主稲田邦植は、同年十月にそれまで東京都芝の増上寺が管轄していた静内郡および色丹島の支配を命じられ、翌四年二月には稲田家家臣の先発隊四十七人が入植準備のため入り、五月までに第一陣百三十七戸五百四十六人が移住した。しかし、第二陣二百三十四人の乗船した平運丸という船が北海道へ向かう途中紀州沖で難船し、八十三人が遭難するようなことがあったり、稲田邦植が同年八月に静内郡支配を罷免されるようなことがあり、集団移住は止まった。

実はこの静内移住は突然起こってきたわけではなく、もともと徳島が藍作に不可欠な魚肥（鰊・鰯）の産地である北海道とは強い関係を持っていた上に、明治二年には静内の隣郡新冠郡が当時まだ阿波国主であった蜂須賀家の支配地域となっていたという事実があり、稲田移住後にはその新冠の実質的な支配も稲田家が行っていたようである。

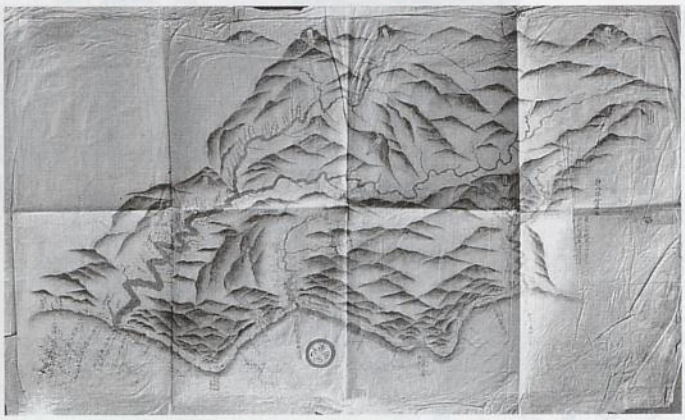
静内町内には郷土資料館があり、そこには移住後の史料を中心に数点の稲田家関係資料が残されている。そのうち一点の資料を紹介してみたい。

解読文

淡路守殿海陸無
異儀去ル三日御着城
珍重存候山田斉
津田平馬迄芳札
令披覧欣然之至候
恐々謹言
五月十八日　印　蜂　隠岐
稲田大炊殿

読み下し文

淡路守殿海陸異儀
無く、去る三日御着城
珍重に存じ候。山田斉
津田平馬まで芳札
披覧せしめ、欣然の至りに候
恐々謹言
五月十八日　印　蜂　隠岐
稲田大炊殿



日高国静内郡図①　北海道大学図書館蔵

用語解説

淡路守　六代徳島藩主蜂須賀淡路守綱矩のこと。延宝六年十月（一六七八）に相続し、同月新田五万石を飛騨守隆重に分与する。享保十三年正月（一七二八）隠居、同十五年十一月（一七三〇）没七十才。

山田斉　徳島藩仕置家老山田織部真胤の幼名か。山田織部は延享元年召出、宝暦元年二月（一七五一）相続とあり少し時代がずれるかもしれない。

津田平馬　不詳。

芳札　他人の手紙の敬称。ここでは、淡路守の手紙のことか。

披覧　ひらきみること。披見。

欣然　よろこぶさま。

蜂　隠岐　三代阿波富田藩主蜂須賀隠岐守正員のこと。実は六代阿波藩主綱矩の七男、宝永六年正月（一六七八）生まれ、宝永六年十一月阿波富田藩主隆長の養子となり、正徳四年九月（一七一二）相続、享保十年七月嗣子となり分知を返納する。十三年正月七代阿波藩主伯耆守（後淡路守）宗員となる。享保二十年六月（一七三五）没二十七才。

稲田大炊　洲本城代家老稲田九郎兵衛植治の幼名大炊助のことか。植治は、享保五年十二月（一七二〇）に相続、同七年九月に没している。

文書館のあゆみ

平成9年6月～平成10年2月

平成9年	
6月13日	全国公文書館館長会議（東京都）
6月16・17日	古文書調査（兵庫県龍野市）
6月22日	酒井家文書総合調査報告会
6月27日	文書館協議会・調査員会
7月5日	古文書講座（7／12、8／9、9／6）
7月24日	文書資料保存研修会（7／24・25・29・30）
8月2日～10日	文化の森同和問題啓発資料展
8月6日	北海道移住関係資料調査委員会
8月22日	新任教員初任者研修
9月27日	鳴門史学会研究大会
9月28日～10月2日	北海道移住関係資料調査（北海道札幌市・江別市・静内町・仁木町・壮瞥町ほか）
9月10日	歴史講演会　大和武生前文書館長「近世阿波の再発見」
10月14日	国際公文書館長会議東アジア支部総会（東京都）
10月27日～	第15回企画展「吉野川中流域の豪農 ―藍師天野家文書より―」
11月5・6日	全国都道府県史連絡協議会（豊橋市）
11月8日	歴史講座（12／6・12／20・1／30）
11月12～14日	全国歴史保存利用機関連絡協議会全国大会（高松市）
12月2～8日	文化の森同和問題啓発展
12月13日	徳島の古文書を読む会運営委員会
12月16日	大型絵図撮影会（名古屋市）
12月18～19日	行政資料収集（県庁）
平成10年	
1月27日～	第15回資料紹介展「包む・封ずる ―封紙・封書の世界―」

【お知らせ】

北海道移住関係資料調査事業について

文書館では平成9・10年度の2年間をかけて北海道移住関係資料調査を行ってます。事業内容は次のとおりです。

(1) 調査委員会

平井松午　徳島大学助教授（委員長）
桑原真人　札幌大学教授
中村英重　札幌市史編纂委員
松本　博　城南高校教諭
佐藤正志　摂南大学助教授

(2) 調査報告書の作成

(3) 第17回資料紹介展の開催

「徳島県民の北海道移住」

(4) 北海道移住シンポジュウムの開催

平成11年3月21日（日）
21世紀館イベントホール

平成10年度古文書講座受講者の募集

徳島オリジナルの史料を使った基礎からの講座です。古文書や徳島の歴史に関心のある方ふるってご応募ください。

定員　45名
受付期間　4月1日～20日
お問い合わせ　文書館古文書係まで

北海道のりんご

編集後記

徳島県民の北海道移住調査がはじまりました。この事業の概要が新聞報道されて以来、県内各地はおよばず北海道からも問い合わせや、情報の提供が相次いでおり、反響の大きさに驚かされます。このことはいかに多くの人々が徳島から北海道へ渡り、いまなお大きな関係や交流を行っていることの証拠です。

幾世代を経た現在、関係者の高齢化や資料の散逸が進み、先祖の貴重な足跡が失われようとしています。このため子孫の人々が今ある自分たちのルーツを確認し、先祖の苦闘の跡を語り伝えていこうとする熱い思いがあります。

このことが移住の歴史を探究し、記録に留め、記念史・誌を作成しようという行為となっているように思えます。

幸い北海道には北海道立文書館をはじめ道内各地に、未発掘の膨大な関係資料が存在しています。記録資料の収集・整理・保存・活用という文書館本来の最も核心的な使命ひとつがここに在るように思えます。

どんな小さなことでも結構ですから関係資料や情報をどんどんお寄せ下さい。

（立石）

文書館だより　第11号
平成十（一九九八）年二月一日発行
編集兼発行　徳島県立文書館
〒七七〇－八〇七〇
徳島市八万町向寺山
文化の森総合公園内
印刷　㈱教育出版センター